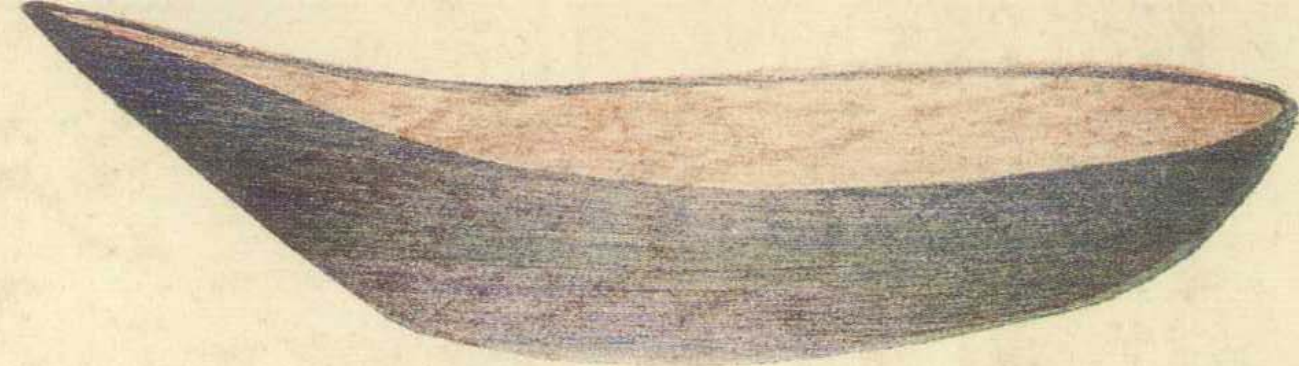




人、夢に暮らす

Noriyuki Adachi

足立倫行



新潮文庫

ひと ゆめ く
人、夢に暮らす

新潮文庫

あ-25-2



平成二年六月十五日 印刷
平成二年六月二十五日 発行

著 者 足 立 倫 行
あ だち の り ゆき

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

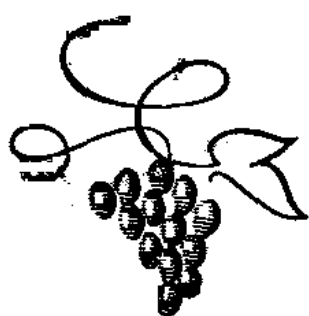
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎 製本・有限会社加藤新栄社
© Noriyuki Adachi 1988 Printed in Japan

ISBN4-10-102212-7 C0195

新潮文庫

人、夢に暮らす



新潮社版

4485

目

次

若き鷹匠の夢	九
職司配膳	二六
対州名産「満山釣」物語	四六
繡師 ^{ぬいし} 一代・極道始末記	六三
野菜の絆	八一
それぞれの春	八八
明日の関取たち	九五
エレキギターの証明	一二三
ショッピングバッグ・レディ	一三五
銀座の野鳥	一三九
ケンカ牛のいる島	一四七

国境が見える町	一六
金華山の鹿守	一八
最後の展覧会	二〇
青春の天ぷら	二七
マダムとムツシュ	二四
ある学徒兵たちの想い	三二
少女たちの空母「ミッドウェー」	二九
愛称ニック	二六
日記の鎖	二七
文庫版のためのあとがき	二九

人、夢に暮らす

若き鷹匠たかじようの夢

雪中キャンプ

中山峠は札幌市郊外の定山溪温泉じようざんけいから約十六キロ、札幌と洞爺湖とうやを結ぶ国道230号のほぼ中央にある。山形県在住の鷹匠松原英俊（31歳）が初の北海道遠征のキャンプ地を置いたのは、その中山峠から二キロほど北に入った小喜茂別岳こきもべつだけの麓ふもとだった。

十二月十二日朝、僕は峠の国民宿舎から雪の林道を一時間ばかり歩いて登り、ようやくダケカンバの林の中の小さな赤いテントを見つけた。

「おーい、まだ生きてるかーい？」

冗談まじりに呼んでみると、返事がない。カマボコ型の赤テントは、細い鉄の骨格を露あらわに見せて半分雪の中に埋もれ、ひっそりとしている。急に不吉なものを感じた。

「松原さん、いるの！」

本気になって呼びかけると、

「はい、いますけど……」

東北訛なまりののんびりした声が返ってきた。テントの入口がゴソゴソ動き、乱れた頭髮に度の強い眼鏡、伸び放題の髭ひげと欠けた前歯、山男然とした風貌ふうぼうの中にもどこか少年のあどけなさ

の残る松原の顔がのっそりと現われた。人間の気配に興奮したのだろう、テントの中の加無号がピーヨと一声、あたりの静けさを切り裂くような鋭い声で啼く。

「ああ驚いた。遭難したかと思って……」

松原は首を振り、微笑んだ。

テントの中には湯気が充満していた。片隅の鍋の中ではインスタント・ラーメンが煮えている。松原はそこの中へ餅を一個放り込み、

「今回はちよつとぜいたくしてゐるんだ」とかきまぜた。

ラーメンに加えた餅一個、それが松原の言う「ぜいたく」だった。十日間の遠征用食糧として松原は、二十五個のインスタント・ラーメンと板状の二枚の切り餅を持って来た。朝夕はそれだけ、狩りの途中での昼食は飴やキャンデーですますつもりなのだ。「肉は獲物がとれた時に食える」とは言うものの、いかにも乏しい。しかし、必要最小限の出費しかない、それが松原の遠征旅行の鉄則だった。

現在、日本国内の鷹匠は、松原と同じくクマタカを使う鷹匠が秋田に一人、一回り小さいオオタカを使う鷹匠なら千葉などに数人いるが、いずれも別に職業を持っている人々で遠征はしない。ところが「自由労働者」を標榜する松原には別に本業というものが無い。シーズンの夏場は地元山形県で森林伐採などのアルバイトをしている。「年収」は約二十五万円。この少ない資金で、これまでどんな鷹匠も試みることもなかった遠征旅行を敢行しようとするれば、当然浪費は慎まねばならない。昨シーズンの月山や乳頭山への遠征では、ラーメ

ンに餅は入っていないかったのだ。

「うまいなア。やっぱ餅が入っていると、腹に充実感を覚えるよ」

「充実感」という言葉に力をこめ、松原は眼鏡の奥の小さな眼を細めた。

その時、再び、加無号が啼いた。テントの一角をビニールで仕切った小部屋で、長く尾を引き甲高く、何度も啼いた。絶食中のその声は、「警戒」や「威嚇」ではなく明らかな「空腹」を訴えていた。一昨日にニワトリの生肉わずか百グラムを食べたきり、この日の朝まで固形物を何も胃袋に入れてないのだ。

松原は厚い手袋に似た籠手を左手にはめた。

「……来い」

ビニールの布を引き上げ、呼びかける。

止まり木から褐色の動物が跳び移った。体長七十センチ、体重二・五キロ、絶食のせいで精悍さを増した三歳半のオスのクマタカは、カツと見開いた黄金色の目で僕を見据えた。ニワトリをわずか五分で圧死させる強力な脚の爪で松原の腕を掴み直す。鋭く直角に曲がった黒光りのする嘴をピクピクと震わす……。加無号が現われただけでテントの中の空気は一変した。サツと緊張感が流れた。まさしく、本物の猛禽類だけが持つ威圧感だった。

松原はそんな加無号をしばらく見詰め、それから、言いきかせるように言った。

「じゃあ、出かけようか……」

日本の鷹狩りは二つの系統にわけられる。一つは遊獵としての鷹狩りであり、古来武士や大名が心身の鍛練のために発達させてきたもの。もう一つは純然たる生活のための鷹狩りで、東北の農民たちが冬期の副業として伝えてきたものだ（松原の場合は農民系）。

二つの鷹狩りは使うタカの種類も使用方法も異なる。武士階級の鷹狩りではハヤブサやオオタカなどを使って草原で行なわれ、多数の勢子や犬に獲物（キジ、カモ、ヤマドリなど）を追いつけてさせ、飛び出てきたところをハヤブサの場合は空中で蹴落とし、オオタカではワシ掴みにさせて、それぞれ捕える。

一方の農民式鷹狩りでは、タカの中で最大級のクマタカを専門的に使う。獵場はもっぱら雪に覆われた山の中であり、尾根伝いに山の稜線を歩き、足音に驚いた獲物（ノウサギがほとんど）が飛び出すと、タカが急降下して両脚で獲物を掴み、圧死させる。

ただし、野生のタカに鷹狩りのタカとしての訓練を施す方法はどちらもあまり違わない。タカの訓練は「据えに始まり据えに終わる」と言われる。「据え」、つまり勇猛な性質を持つタカを静かに腕の上にとまらせておくことだ。最初は真つ暗闇の中で訓練を始める。暗箱から出した野生のタカを暗闇の中で腕に乗せる。これを何日か繰り返す。次に、ローソクを部屋の隅に置き、一日ごとにタカに近づけて明るさに慣らす練習。ローソクに慣れたら今度は夜明けの薄明かり、そして昼光へと進む。ここまででも約三週間はかかる。

朝、昼、晩と家の周囲を巡回し、明るさや物音に驚かなくなれば、ようやく狩りの訓練である。縛りつけたニワトリやウサギの皮に向かって、脚紐を付けたままのタカを飛ばす。正

確に獲物を襲い、失敗しても再び手許てもとに帰ってくるまで、何度も何度もやり直す。

一〜二カ月こうした訓練を積みばいちおうの基礎は作れるが、本番となるとまた別である。野生のタカは一度獲物を倒すとその後一週間は獲物に関心を示さないほど食べてしまうが、これでは猟はできない。狩猟本能を一定期間研ぎ澄とますため、絶食が必要となる。

クマタカの場合、十一月になると、それまで五日に一羽与えていたニワトリの生肉を中止し、水だけを約二十日間飲ませる。二十日目に餌えさを少量与え、また一週間の絶食。餌をやつて、次に三〜四日の絶食。また少し餌を食べさせ、以後シーズン中ずっと一〜二日間隔の絶食を繰り返す。絶食を長く続けていると、タカは痩やせ細こって声は嗄しゃがれ、口の中は白くなり、脚は黄色味をおびてくる。絶食がすぎると、便が緑色に変わってきて死に至る。

「十の体力があるものなら、四になればタカは死ぬ。それを五か六の状態に維持しながら使うんだ」

そこがタカの訓練のもっとも難しいところだと松原は言う。細心の注意を払ってタカを慢性飢餓状態に置いておけるかどうか、鷹匠の技術がかかっているのだ、と。

鷹匠への道

「でも技術だけじゃダメなんだ。自然の中で動物や植物と一緒に生きる、その方が重要で、鷹匠というのはそういう生活を維持するため、たまたまタカを使ってるだけなんだ」

自分が鷹匠であることについて、松原はそう説明する。

松原は昭和二十五年五月三十日、青森県青森市に銀行員を父、小学校教師を母として生まれた。子供のころから動物好きの少年だったが、決定的な出来事と言えば、やはり、中学時代にテレビで、ある記録映画を見たことだろう。昭和三十七年日本テレビ制作、カンヌ・グランプリ受賞『老人と鷹』。大自然の中で生きる老人と鷹の心の触れ合いを描いたこの映画に、少年の松原は「物も言えないくらい感動した」。

昭和四十四年、松原は慶応大学文学部に入学した。所属したクラブは「野鳥の会」、しかしすぐに辞める。人間関係に馴染めなかったせいだ。馴染めなかったのは人間関係ばかりでなく、都会生活そのものにも馴染めなかった。松原は山へ向かった。槍、穂高、乗鞍、日本の三千メートル級の山々は残らず制覇した。いつも一人で登った。一人で山登りしている時が「唯一自分が自由だと実感できる時」だった。このころ世界探検旅行に憧れ、その体力づくりのために、東京―青森間約八百キロを二十日かけて歩いたり、交通事故で死んだ猫を自分で料理して食べてみたりもした。

「学校の近くの本屋の親爺が言ってたよ。『五十年ほど学生を見てるけど慶応じゃあんたみたいなタイプは初めてだ』って」

三年生になった時、松原は急に山奥で暮らしてみたくなり、岩手県北上山地の山形村に引きこもった。養蚕小屋に住み込んで農作業を手伝ったり山の獣を罠で捕えたりの日。半年間暮らしたが、何か物足りなかった。自分の望んでいたのが自然の中で動植物と一緒に暮らすことだったとわかって、村の居候では仕方ない。山の生活と自分を結びつける何かがな

ければ。その時、イナズマのように閃いたのが、少年の日に見た『老人と鷹』のシーンである。山に住み、夏は農業、冬は鷹狩りをなりわいとする農民鷹匠。松原は、「これだ！」と思った。

昭和四十九年、大学を卒業した松原はさつそく「最後の鷹匠」と呼ばれ『老人と鷹』のモデルともなった沓沢朝治翁を山形県真室川町関沢の自宅に訪ねた。沓沢は当時七十九歳、すでに山歩きのできる身体ではなかったが、松原は御百度を踏んで弟子入りを請うた。根負けした沓沢が「そんなに言うのなら……」と頷いたのは昭和四十九年九月二十七日のことである。

しかし、「鷹匠最後の弟子松原君」の記事が新聞、週刊誌を賑わしたのはわずか一冬にすぎない。翌年九月、松原は喧嘩別れの形で師匠沓沢の家を出て行く。

その詳細について、松原は多くを語らない。修業の辛さではなく沓沢家の人間関係に巻き込まれたことが原因だったとは言え、松原もまた、かつての多くの弟子志願者同様、沓沢のもとを去った若者の一人だった。ただし、それまでの弟子志願者が挫折後例外なくタカと無縁の人生を選んだのに対し、一人松原だけは、鷹匠になる意志を曲げなかった。

昭和五十五年二月十三日午前十一時、松原の左手から飛び立ったクマタカ加無号が、雪の斜面を駆けて行くウサギを初めて捕えた。

「嬉しかったね。雪の上でオイオイ泣いたよ。その瞬間だけを夢に見て頑張ってきたわけだからね……。生涯最高の時だった」